
晴れ時々曇り

三日月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ時々曇り

【Zコード】

Z2111F

【作者名】

三日月

【あらすじ】

こんなつらい思いをするくらになら、恋なんてしたくなかった…

プロローグ（前書き）

全然更新できないと思ひますが、どうぞ見てやって下せこ（・・・）
ノ

プロローグ

愛されると、辛い思いをたくさんする。
愛されると、辛い思いはしない。

私は、どちらがいいかは分からぬ。
……ただし、これだけはわかる。愛しあうと、私がいつも甘
だつて」と。

「美紗あ！今から合コン行かなあい？？」

友達の任技 華菜が、私を誘つてきた。どうしようかと悩んでいた
が、華菜の

「美紗好みの人来るよーーー！」

の一言で、行くことに決めた。

学校がやっと終わり、カラオケへと急ぐ。

（私好みかあ・・・ほんとにいたら最高っ） そんな事を考えながら、身なりを整え、中へ入る。今は自己紹介中だった。私は、男の顔を見ていく。私好みの人はいない。。。が、このまま帰る訳にもいかず、端っこに座る。（暇だなあ・・・） と思いながら、携帯をいじっていた。そこに、

「遅れたつ！！」

と、声がした。（どうせ、好みじゃないだろうな・・・）と思い、顔をあげなかつた。しばらくすると、誰かが私の横に座り、

「暇だねー 一人でぬけない？？」

と、話しかけてきた。誰だろ？と思い、顔をあげ、その人を見てみると、私好みの人だつた。

「あつ・・・いつ・・・いいですよ。」

緊張しながら、答える。

「良かつた。じゃあ行こうか。」

の声と同時に彼は私の手をひき、部屋からでた。

この先、どうなるかを知つてたら、私は彼についていく事はなかつただろう。

ただ、その時の私には知る由もなかつた。

File2・海（前書き）

更新遅くなりめんなさいっ（・・・・）
らも、のんびりと更新していく予定なんで、暇なときに来てみてく
ださいな（ ）

「美紗つ……あの後どうなったの？！」

朝つぱらから馬鹿でかい声で華菜が私に問う。

あのあと . . .

私達は、いつたん外に出た。しかし、彼は手を離してくれず、とまどつていたら、

「あつ . . . ごめん」

と、言つて手を離してくれた。そんなちっぽけな事にもドキドキしている私がいた。

「 . . . ところで、出たのはいいけど、自己紹介してなかつたよね？」

「そういえば、そうだなと、思い、頷く。

「だよね。

俺は、姫川高校の2年で、荒木 唯つていうんだ。字は、荒れる木に悟る。えつと . . . 君は？？

荒木 唯 . . . かあ。てか、姫川高校つて、あの、有名な？？と、考えてたのが顔にでてたのか、

「俺にとつては普通の高校だけどね」

と、言つた。そして、名前を名乗つていらないのに気付き、

「あつ . . . えつと、私は南魁高校の2年生で、佐敷 美紗つていいます！美紗つて読んでくれて結構ですっ あつ . . . 字は、佐藤の佐に屋敷の敷に、美しいに、糸へんに少ないって字の紗です。

「 . . . と、そこで彼 . . . ジやなくて、悟が笑い始めた。涙までうかべている。少し、ムツとしていると、私に気付いた悟は、

「『めん』『めん』。説明があまりにも詳しくてさつ！」

それのどこがおかしかったのかなあ？？ と考えている内に、

「よしつ！名前も分かつたし、行くか。」

と、声がした。見ると、笑いは止まっていた。

それにしても・・・どこに行くんだろう？

「あつ・・・海に行きたいんだけど、いい？？金は俺持ちで。」

6時だから少しだけ暗い。なのに、なんで行きたいんだろう？寒いし・

・・・

と、思つたが、海好きな私は

「いいよ」

と即答した。

「うつわー！－！きれーつ！－！」

海についたのは6時半で、それなりの暗さだったが、その暗さが、
海のきれいさを更に引き立てていた。しばらく、時間を忘れて海を見
ていたが、視線を感じ、見上げる。そこには、悟の顔があつた。

「あの・・・私の顔になんかついてますか？？」

漫画のような、台詞で悟に聞いた。

すると、悟は

「・・・なんでもないよ。ところで、海、好きなの？」

と、逆に聞いてきた。はぐらかされた気もするが、まつ、いつか。
と、自分を納得させ、質問に答えた。

「うん。大好きー！－！なんかさ、海つて見ると落ち着くんだあ」
そう言った私に、悟は軽く微笑み、

「そつか。」

と、言った。

そのまま、特になにもなく、私達は帰つた。メアドは一応聞いとい
たけど。でも、私はなぜか、メールはこないと確信していた。私が

らも、メールはしてはいけないと、思った。なぜかなのかは、分からぬけれど……。

「……ヒ、いう訳で、メールは一度もしませんっ……報告終わりっ」

言った途端、

「ど、いつ訳で、つて……だいたい、なんでメールしちゃいけないのよ?」

と、華菜が呆れた顔で聞いてきた。

そんなの、私にだって分かんないけど、私の直感がそうこつてるんだもんなあ……うん。仕方ないよね。と、考えていると、

「もうっ!-せつかく、セッティングしてあげたってのに……」

といつ、文句が聞こえてきた。

それならっ、と思い、私は逆に華菜に昨日はどうだったかを聞いてみた。きっと、駄目だろう……と思つて聞いたのに、華菜は、

「私? 私はあんたと違つて、優秀だから、ばつちりゲットできたわよ?」

勝ち誇つた顔で、すんなりと答えた。そして、新しい、彼氏のメアドをみせてきた。

それから、三ヶ月が過ぎたある春の日で、私は、あの、懐かしい、悟の顔を見た。

そこから、私の田舎は崩れていった。

File2・海（後書き）

評価・感想、下さると嬉しいなあ・・・

先に気付いたのは私だつたが、違うよね?と思つた。しかし、彼が私を見て微笑んだのを見て、やっぱり……と、確信した。

「久しぶりだね。」

彼は私に近付き、そう言つた。

「……ほんと久しぶりだね」

突然の再開に驚きながらも、少し嬉しさも感じている自分が嫌だつた。

「あのせ……話たいことあるんだけど、今、大丈夫??」

「少しだけなら……」

と、承諾し、私達は喫茶店に入った。

飲み物を頼んで待つている間、彼が口を開いた。

「……急にごめんね、話したい」とつていうのは、彼女になつてほしいんだ。」

急な展開についていけず戸惑う私に、

「あつ……ごめんね。急に彼女になつて、つて言われても困るよね……実はね……」

と言つて、彼女になつてほしい理由を言つた。

なんでも、彼の父は有名な会社の社長らしい。

つまり、彼はお坊ちゃまつてこと。

そして、社長の息子といえば、政略結婚。

彼は今月までに彼女ができなければ、好きでもない人と結婚させられるんだって。

「 . . .えつと、」「めん。理由は分かったけど、なんで私が分かんないんだけど . . .」

そこまで聞いて、私は疑問に思つた事を聞いた。

「えつと、それは、、、俺、合コンつてした事なくて、あの日が初めてだつたんだ。で . . . 女の子ともあんなり接する機会がなくて、でも、君に . . .」

軽くパニクつていた悟だが、

「つまりっ！－嘘の彼女でも、やっぱり好きな人が良くて君に今頼んでいるんだけど . . .」

やっぱ、駄目だよね？？」と、勢いで言つた。

一瞬なにがおこったか分からなくなり、今度は私がパニックに陥つてしまつた。

「えつと . . .つまり、悟は私が好きだつたこと？」

1番に思つた事を聞いた。すると、悟は、ほんの少し顔を紅色にそめ、頷いた。

かわいいなあ . . .

と思わせる顔で

「駄目 . . .かな . . .？」

と、聞いてきた。

そんな顔をされた私は、断れるはずもなく、頷いてしまつた。

File3・予感（後書き）

読んで下せりてありがとうございましたっ（ ） 更新遅くてごめんなさいww

等書いていただけると喜びます（ ）笑

感想

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2111f/>

晴れ時々曇り

2010年10月28日01時40分発行